

幼稚園でのプレイセラピーの実践研究

—— 幼児の「育つ力」と子育て支援としての効果 ——

中津 郁子*, 久米 禎子*, 粟飯原 良造*,
井上 和臣*, 葛西 真記子*, 吉井 健治*,
今田 雄三*, 曾川 京子*, 小倉 正義*,
末内 佳代**

(キーワード: 幼稚園, プレイセラピー, 育つ力, 子育て支援)

I. 問題と目的

幼稚園や保育園の保育現場で、保育者の理解しにくい手のかかる子どもの増加など、「子どもが変わってきた」という保育者の思いをよく耳にする。また、子どもだけでなく家庭の教育力の低下も言われている(国立教育政策研究所「家庭の教育力再生に関する調査研究」平成18年度)。この家庭の教育力の低下は地域の教育力の低下とも関連しているとも考えられる。また、安藤ら(2008)は「幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ」について複数地域の47幼稚園に質問紙調査を行っている。その結果、幼稚園児の家事専従の母親で、周産期と同様に、抑うつになる割合が高く見られていた。また、抑うつと育児にまつわる否定的な感情とは関係がある可能性が示唆されていた。現在、幼稚園には子育て支援が位置付けられ(「幼稚園教育要領」平成10年)、家庭の教育力や上記のような母親の状態も視野に入れつつ、親を支え、育児に関する問題への対応等も求められている。さらに、本来の業務である保育の中では、子どもの示す様々な問題行動や発達障害児への対応などに保育者が苦慮している現状がある。

幼児の遊びは生活そのものである。ピアジェとインヘルダー(Piaget, J.&Inhelder, B., 1969)は遊びの象徴機能について述べている。例えば、幼児は体を使って飛行機の振りをしたり、何かの事物を飛行機に見立てたりなどの象徴遊びを行う。さらに幼児は、実際の生活で起こっている難しいことを、遊びの中での様々な象徴的な表現を通じてその経験を統合しようとする。ウィニコット(Winnicott, D., 1971)も遊ぶことはそれ自体が治療であるという。

一般的に子どもへの心理療法としてはプレイセラピーが行われている。プレイセラピーとは、遊びを通しての関係性の営み(Landreth, G., 2002)である。子どもに対して、自由に遊ぶ空間を与えると、遊びの中に子どもは象徴的に自己を表現する。それを、理解し受容してくれる大人(セラピスト)との関係の中で、自己治癒力が働き元気になる。このようにプレイセラピーは問題を抱えた子どもへの心理療法として行われるが、予防的に実施することでも、子どもの本来持っている「育つ力」が活性化されると考える。

現在、小学校・中学校ではスクールカウンセラーが配置され、学校現場での生徒や保護者・教員へ臨時的な対応を行っている。しかし、子どもの様々な問題の芽が見える幼稚園や保育園では、地域によっては保育カウンセラーが配置されているが、まだまだ少なく、臨時的対応はあまりなされていないのが現状である。

そこで、本研究では、A市の2幼稚園と連携し、空き教室を利用して子どもへのプレイセラピーを実施することにより、子どもの「育つ力」を高めることが子育て支援となるかどうかを検討する。プレイセラピーを行う大学院生にとっては、地域臨床の訓練の場ともなる。研究代表者は、平成19年から3年間、A市が文科省から研究委託された「幼児教育改善・充実調査研究事業」の運営委員及び保育カウンセラーとして研究に取り組んでいた。また、研究代表者たちは、平成19年から3年間、科学研究費補助金(基盤研究(C))「乳幼児との情動調律が心理療法家の感受性・想像力をはぐくむ教育訓練プログラム」の研究を行った。その成果に関しては鳴門教育大学研究紀要に掲載している(葛西ら, 2009; 中津・両木, 2010)。本研究はこれらの研究をさらに進めたも

*鳴門教育大学 臨床心理士養成コース

**鳴門教育大学 学校臨床実践コース

のである。具体的には以下の通りである。

研究1：幼稚園の空き教室を利用して臨床心理学を学ぶ大学院生がプレイセラピーを実施する。対象児は保護者からの依頼や、幼稚園教員が気にかかる幼児を保護者の許可を得て実施するものとする。プレイセラピーにより幼児の「育つ力」をどのように高めることが出来たかを検討する。

研究2：幼稚園でのコンサルテーションや必要に応じた保護者との話し合いにより、幼稚園の教育力や家庭の育児力、親子の関係性の変化等がどのようであったかを検討する。また、総合的に子育て支援としてどのように機能したかを検討する。

Ⅱ. 方法

1. 対象者

プレイセラピーの対象となった幼児はB幼稚園4名とC幼稚園5名の合計9名である。年齢は、年少児が3名、年長児が6名で、性別は男児が7名、女児が2名である。プレイセラピーの期間は平成22年4月から平成23年2月末までの間であるが、対象児によって実施期間は多少異なっている。また、幼稚園の夏休み等や行事等の関係でプレイセラピーが休みになることもあり、実施回数は10~20回である。1名は5回程で中断した。対象となった幼児のプレイセラピー前の姿としては様々であるが、保護者や保育者との話し合いの中で、集団行動が苦手な幼児が多く、行動が乱暴であったり、気持ちのコントロールが難しかったりする幼児などの姿が見られ、それらの改善を願っていた。

2. 実践の手続き

- (1) 幼稚園の空き教室に遊具等を設置し、幼児がある程度守られた空間でセラピスト（以下Thと表記）と一対一で遊べるようにする。
- (2) 保護者の依頼や許可を得た幼児に、基本的に週に1回40~50分のプレイセラピーを実施する。
- (3) プレイセラピーは、保育実習等で幼児との情動調律や感受性訓練を受けた大学院2年生がThとして担当する。そして毎回の逐語録を基に指導を受ける。
- (4) 対象となった幼児の保護者に対しては、大学教員が、実践が始まる前にプレイセラピーに関する説明と幼児の生育歴等を聞き、困っていることや期待する姿等について話し合いを行った。実践中は必要に応じて保護者との話し合いを持った。また、実践の終了後に、幼児の成長と今後のことについて等の話し合いを行った。幼稚園の教員には必要に応じて、情報交換やコンサルテーションを行ったり、保護者との話し合いに参加したりしていただいた。また、保護者や教員との話し合いにはThも必要に応じて参加した。

3. 研究の方法

- (1) 研究1：幼児の「育つ力」の検討

プレイセラピー実施の前後に、幼児の行動や性格等に関する質問紙調査を行い、どのような効果が見られるかを検討する。質問紙は「TS式幼児・児童性格診断検査」及び「STRENGTHS AND DIFFICULTIES QUESTIONNAIRE (SDQと略す。調査に当たっては、「子どもの長所・短所についての質問紙」と表示)をセラピーの前後に幼稚園教員に依頼して実施する。回答に当たっては、幼児を良く知っている担任または保育者にお申し、前後の記入は同一の方に依頼した。また、実践の逐語録を分析することで幼児の「育つ力」がどのように向上したかを検討する。

- (2) 研究2：子育て支援としての検討

幼稚園の教員に対しては、大学教員が幼児の行動や心の状態の理解について等のコンサルテーションや情報交換を行う。そして、プレイセラピー実施後に幼児がどのように変化し、幼稚園の教育力がどのように変化したかについて話し合いを行う。また、プレイセラピーの対象になった幼児の保護者に対しても話し合いを行い親子の関係性の変化や育児力の変化等、その効果について検討する。これらが、子育て支援の新たな方法としてどのような効果があるか検討を行う。

Ⅲ. 結 果

1. 質問紙調査の結果

「TS 式幼児・児童性格診断検査」は、「顕示性が強いー顕示性なし」や「神経質ー神経質でない」、「情緒不安定ー情緒安定」などの性格傾向等13項目に分かれて、パーセンタイル・プロフィールで示すようになっている。この質問紙を、プレイセラピー実施の前後で実施した。13項目のうち、「家庭不適応ー適応」と「体質的不安定ー体質的安定」「社会的不安定ー社会的安定」の項目は担任には判断しにくい項目が多いため考察からは除外した。プレイセラピーの前後でどのような変化が見られたかを9名の幼児個々に検討した結果、図1のEのプロフィールのように、プレイセラピー実施後の方が、プロフィールが比較的右寄りであり、成長している項目が多く、「個人的不安定ー個人的安定」が安定の方に近づいていた幼児が7名だった。逆に図2のFのプロフィールのように実施後の方が比較的プロフィールが左寄りであり、「個人的不安定ー個人的安定」が不安定の方に近づいていた幼児が2名だった。

SDQ は、25の質問項目があり、それらが、「①感情的症状スケール」「②行為問題スケール」「③多動性スケール」「④交友問題スケール」「⑤社会的行動スケール」と5つのスケールに分かれている。1つのスケールの点数は0～10点となる。①から④の合計を Total Difficulties Score (以下 TDS) とする。⑤はポジティブな面を評価している。実施前後の幼児の変化を見た。TDS が実施前よりも実施後の方が低くなっている幼児が多かったが、2名は実施後の方が高くなっていた。「⑤社会的行動スケール」の得点は全ての幼児が実施後の方が高くなるか同点であった。つまり、情緒的に安定し、行為問題が少なくなり、友達との関係が増え社会性が増すという結果である。9名と少人数ではあるが、念のため検定を行ってどの項目が変化したかを見た。その結果、表1の

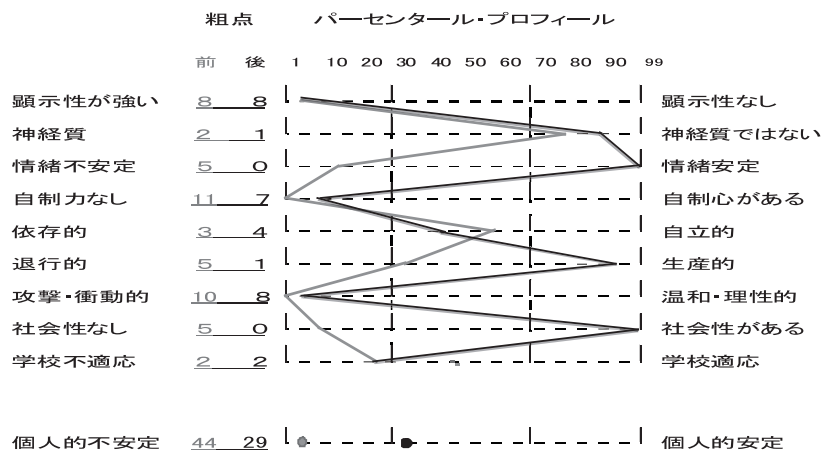


図1. Eのプロフィール (黒色が実施後・灰色が実施前)

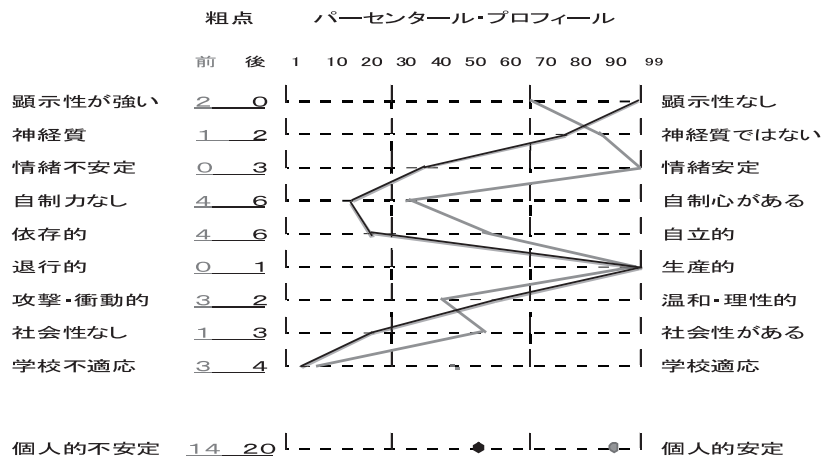


図2. Fのプロフィール (黒色が実施後・灰色が実施前)

表1. SDQの実施前後の比較

	感情的症状	行為問題	多動性	交友問題	社会的行動
実施前	1. 67(1. 66)	2. 33(1. 80)	4. 11(1. 90)	5. 11(2. 26)	1. 44(2. 01)
実施後	1. 33(1. 32)	2. 22(1. 64)	4. 22(2. 82)	2. 78(1. 09)	4. 00(2. 55)
t値	0. 53 n. s.	0. 15 n. s.	-0. 24 n. s.	4. 22 p<. 05	-3. 94 p<. 05

() 内はSD N=9

ように、「④交友問題スケール」(t=4.22, p<.05)と「⑤社会的行動スケール」(t= -3.94, p<.05)で有意差が見られた。交友問題が減って、社会的行動が増加したという結果だった。

2. プレイセラピーの一例

平成22年10月から平成23年2月末までの対象児(Dとする)の11回の記録を簡略にまとめたものである。Dは年長児の男児である。Dの言葉は「」で表記し、Thの言葉は<>で表記する。

(1) プレイセラピーの内容

#1 : DはThにゴセイジャー(テレビ番組の戦闘物のヒーロー達)を紹介し戦いが始まった。#2 : 剣をもつての戦いをした。Thが自分の体を防御しようとする、「ちゃんとして」と言われた。Dはステージに立ち、「みんなが見よるからここでやりたい」「ゴセイレッドがんばれーって応援しよる?」と聞くので、頷くと、にっこり笑う。時間終了を伝えるが不満顔だった。#3 : Dの勢いと刀にThは腰が引け、防御するのに精一杯だった。DはThに「前に倒れて」「追いかけて」など指示を出しながら遊んだ。仮面ライダーになって戦った。「みんな仮面ライダー(D)をがんばれーって応援しよる?」と聞くので、応援しているよと伝えると満足そうな顔をした。#4 : Thは逃げずにDのファンタジーの世界の登場人物になって戦った。Dと向い合わせに寝そべって、ゴセイジャーのフィギュアで遊んだ。ばらまかれたねじ(悪者)の中にピンクとイエローを立たせ、「男が女を助けに来る」とつぶやいた。レッドは悪者と戦い倒した。時間を告げると黙ったままそっぽを向き、「何回も言わんでもわかる」。窓の外から幼稚園児が遊んでいるのを見て、「お外遊びしよー」と後ろ向きに手を振って帰って行った。

#5 : ゴセイレッドがイエローを助けるという展開。DはThの剣に自分の剣を力一杯当てた。Thは怖くなり目をつぶって後ろに下がってしまうが、逃げずにDの攻撃を受け止めた。おもちゃのカゴをさかさにしてじゃら〜と中身を全部出し満足そうにした。ゴセイレッドをスーパーゴセイレッドに変身させ、Thのゴセイピンクもスーパーゴセイピンクに変身させた。ぼぼちゃん人形をクモの巣に見立てたおもちゃの中から救出するという展開。時間が来たので告げるが、「決まり決まり、ごちゃごちゃうるさい」と怒り、沈黙した。

#6 : Dは連続でThを斬りThは倒れた。すると、Dは両手を上にあげ天を仰ぐように「わ〜はっはっは〜」と高らかに笑った。倒れているThの背中をぐりぐりと踏みつけてはまた笑い「この世界は俺のものだ〜!」と言った。その後プラレールの線路を取り出しつなげようとするが、「できん」とThを見ながらもじもじしクッションにもたれかかった。Thがやり方を少し教えると「できた」「すごい?」と聞いた。Dはできた線路を持って「蛇だぞ〜」「食べちゃうぞ〜」と追いかけて腕をつかんで「もう食べたよ」。時間を告げるとDは退室をしぶった。

#7 : Dはゴセイレッド、Thはゴセイピンクになって遊んだ。途中でDが「仲間になろう」と言い、二人で敵と戦いDが敵に最後のとどめをさした。Dは窓の外を見て、「外遊びしたいけん帰る」と走って行った。

#8 : 入室しThを見て、「また君か」とニヤッと笑った。剣で戦った。Thが倒れると足を乗せて高らかに笑い、笑った後「仲間に入れてやる」と言い、二人で敵と戦った。しばらく遊んだ後、窓の外を見て「お友達おるよ」とつぶやいた。時間終了を告げると、Dは立ち上がり帰って行った。

#9 : Dはシンケンレッド、Thは男になって戦った。本気で戦わなければならないという気がしてThはDを斬っていった。Dは「うっ、うっ」と苦しそうに倒れこむが、「まだまだ」と起き上がり戦った。「首絞めて」、「(お腹を)踏んで」と言われ、Thがそのようにすると、Dは苦しそうに倒れ死んだふりをした。<俺の勝ちだ〜!>。Dはゆっくり起き上がりながら両手を挙げ「わああ〜」「お前に世界は壊させない!」と叫んだ。退室時、DはThの方へ振り返って「プレゼント!」と、Thの二の腕に軽くパンチをして帰っていった。

#10: 残りのセッション数が1回しかないことを伝えると、唇をかみながら「6歳になったから我慢できる、寂しくない」と伏し目がちに言った。Dは仮面ライダー、Thは男になって剣で戦った。<ぐさぐさ、じょきーじょきー>前回のセッションと同じように、Thに斬られてDは倒れるが復活し戦うという展開を繰り返した。「うわああ」とDは復活し、Thに斬りかかった。<うっ、さすがだ、強いな>とThが言うと、Dは真剣な表情で「弱いときもあるんだよ」と言った。<・・弱いときもあるのか>Dは険しい表情になり「でも、今は強いんだよー!」と叫びながらThにパンチをした。退室時、Dは残りのセッション数を確認した。<あと1回遊べるよ>「やだ!」<うん、嫌だね・・>Dは立ち止まってThを見上げ「俺からのプレゼントだ!」とThのお腹にパンチをして帰っていった。<またね〜>手を振り合った。

#11: D(シンケンレッド)とTh(シンケンイエロー)は仲間になり、敵を斬っていった。その後、Dは「まだ時間ある?」と聞き、Thをじーっと見つめた。Dはニワトリ(人形)のくちばしを触り「きゅーきゅー」と鳴いた。Dはニワトリの目を指でなぞり「涙、泣いてる」と言った。その後、Dとニワトリ、Dと赤ちゃん(ぼちゃん人形)が仲間になって、それぞれThと戦った。DはThにやられて倒れたが、復活して反撃しThを倒した。終了時間を告げると「やだ」とロボットを作り始めた。<お別れって寂しいね・・>Dは遊びを続けようとした。<終わりだよ>「ん〜・・お話しよう」Dは仰向けに寝転び「俺バカだ」と何度も言った。<バカだと思うの? どうして?>「やだ、まだ遊びたい」<遊びたいからバカ?>頷くD。<まだ遊びたいね、でも終わらなきゃ・・Dくんのこと忘れないよ>「・・お外遊びよりもここで遊ぶ方が楽しい」<そうかあ、でもお外遊びも楽しいと思うよ、きっと>Dは少し上を見上げて「うん、お外遊び少し楽しくなった」と言った。Dは立ち上がって窓の外(お外遊びする場所)を見た。背伸びをするが「見えない抱っこして」と言った。ThはDを抱っこして一緒に窓の外を見た。「・・海があるよ」<海? うん、あるね>Thは覚悟を決め<終わろう!>とDに伝えた。DはThをじっと見た後、一度も振り返らず走って教室へ帰っていった。

(2) セラピストによる考察

#1~3ではDのファンタジーの世界にThが入り込めなかった。#4で、逃げずにDの言うとおりにやってみようと心に決めた。すると、躊躇せずDのファンタジーの世界で遊ぶことができるようになってきた。Dが自分の欲求や要求を言葉に出すことが出来、DとThの間の信頼関係が少しずつ形成され、Dにとってプレイセラピーの場が安心できるものになってきた。すべてのセッションで必ずDとThは戦いをしてきた。はじめはDがThに対して一方的に攻撃し、Dは強い自分になりたい気持ちを表現していた。Thから<強いね>と認めてもらったこと、そして、自分のファンタジーの世界と一緒に入り込んでくれるThとの出会いにより、Dは自信をつけてきた。#9でThは初めて男になって戦い、これまでの中で一番真剣に戦うことができた。またDの表情が今までで一番生き生きしていた。その回のThはなかなか強く、Dはやられながらも立ち向かう勇敢なヒーローの様であった。Dの中に手ごわい相手と戦える強さ、自信が出来てきたように感じた。#10では(その前の回に伝えていた)セッション数が減ったことを受け止め、乗り越えようとしたり、自分の弱い部分を認め、強がりでない本来の強さを身につけてきたりしていると感じた。そして#11で、別れはつらいが乗り越えようとするDの気持ちを感じた。「お外遊びが少し楽しくなった」という言葉や振り返らずに帰って行った後姿から、Dがたくましくなったように感じた。

3. 保護者・保育者との話し合い

対象となった幼児の保護者とは、プレイセラピー実施前に、プレイセラピーについての説明や幼児の様子・保護者の願いなどについての聞き取りや話し合いを行った。また、実施後にはプレイセラピーの中で見られた幼児の成長や家庭での様子、今後のことについて等の話し合いを行った。さらに、必要に応じて途中で1~2回の話し合いの機会をもった人もいた。話し合いの内容は、主として家庭での親の関わり方に関することや幼児の行動理解に関するものであった。プレイセラピー後の話し合いで、保護者9名中7名は、プレイセラピーにより子どもが成長したと捉えていた。例えば、「気持ちの切り替えが早くなった」「友達に気持ちが向くようになった」「集団の中にスムーズに入れるようになった」などであった。ただし、1名とは話し合いの機会が一度も持てなかった。

幼稚園の教員とは必要に応じて情報交換を行ったり、コンサルテーションを行ったりした。コンサルテーションでは、保護者への対応の仕方や幼児理解、幼児への対応方法などについてであった。また、保護者との話し合いにも必要に応じて参加していただいた。幼稚園の教員との話し合いの中からは、対象幼児9名中8名の問題行動が減少し、その子なりの発達が促されたと評価していた。

例えば、上記プレイセラピーの一例で挙げた幼児 D に関しては、担任から、「いい時期にプレイセラピーをやってもらえた」、「一対一の関係で、じっくり遊びに付き合ってもらったことが良かったと思う。それが大事なんですね」という感想が話された。D はプレイセラピーが始まる前は一人遊びが多かったが、自分から友達に誘いかけて遊ぶようになったとのことだった。また、その年の生活発表会では意欲的に歌や踊りを披露し、その成長に保護者と共に驚き、喜んだとのことだった。母親からは、D がプレイセラピーをとても楽しみにしていたことや、「私にも『・・レンジャーしよう』と言うようになりました」、「友達と遊べないことを悔しがるようにになりました」などの気づきが話された。

IV. 考 察

1. 幼児の「育つ力」の検討

質問紙調査の結果からは、プレイセラピーの実施後は、ほとんどの対象幼児が何らかの成長をしていることが伺えた。特に、SDQ の調査結果からは交友問題スケールと社会的行動スケールが変化していた。すなわち、「一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い」「他の子ども達より、大人といる方がうまくいくようだ」等の状態が少なくなり、「他の子ども達から、だいたい好かれている」「仲の良い友達が少なくとも一人はいる」等の状態であった。また、「他人の心情をよく気づかう」ことや「他の子どもとおもちゃなどを分け合う」「年下の子ども達に対してやさしい」などの社会性が促されているようだった。大体の幼児が特に気になる状況が改善して社会性が増していたと幼稚園の教員はとらえていた。ただこれは、元々対象になった幼児が、対人関係の面で気になる幼児が多かったこともあり、その面が成長したとも考えられる。また、SDQ の調査で、TDS がプレイセラピー実施後の方が高くなっていた 2 名の幼児に関しても、プレイセラピーの時間はとても楽しみにしておりその幼児なりの成長が見られたと保護者はとらえていた。しかし、幼稚園では、1 名は就学を控えて不安を抱えていることが伺えた。また 1 名は活動性や社会性が高まり、感情を出しだしたことが不安定と評価されたが、それまで出来にくかった自己発揮ができるようになっていたとも考えられた。幼稚園の教員も同様のことを話されていた。各幼児のプレイセラピー後の成長に関して、その要因は幼児自身の発達の側面や、幼稚園での保育や友達の影響、家庭での係わり合いの要因など、様々な要因が重なり合っている。その要因の一つとしてプレイセラピーがかかわったのであろうと考える。

それぞれのプレイセラピーの逐語録からは、幼児が Th との関係の中で遊びを存分に楽しんでいて、D 事例に見られるように、一対一の関係性の中で、幼児のやりたい遊びを存分に取り組むことを通して、幼児本来の持っている「育つ力」が活性化されたと考えられる。東山 (2003) は、最も明瞭な治療の条件は、子どもが玩具と自分のためになる大人を持っており、遊びがどんなものであろうと、「演じ尽くすこと」であると述べている。それによって、「子どもの自己治癒力、自然治癒力が働き、子どもは生き生きしてくる」と言う。

また、別の事例では、プレイセラピーを始めて数回で、保育者の気になる行動は少なくなり、クラスの「友達と遊びたいから」とプレイセラピーに来なくなった。その頃から、他の子ども達のリーダー的存在となって遊びを楽しむ姿がよく見られるようになった。

ピアジェは 2 歳から 5・6 歳の幼児は、象徴的遊びをする中から次第に「自己中心性」が「脱中心化」し、「社会化」「客観化」という方向へと向かう (竹内, 1999) と言う。D 達は戦いごっこなどの遊びの中で象徴的に自分の問題を解決していたといえないだろうか。存分に象徴遊びをする中で、「脱中心化」し、弱い自分を客観的に認めることができ、友達との遊びを楽しむという方向に「社会化」していったと考えられる。

2. 子育て支援としての検討

保護者とは、プレイセラピーが始まる前後にはほとんどの方とお話をし、途中で数回お話を伺った方も数名いた。最初は、プレイセラピーの説明と留意事項を話し、幼児の生育歴や期待する姿、気になること等をお伺いした。保護者の気になることに関しては、その行動の意味や理解について話し合い、支持や提案をさせていただいた。どの保護者の方も、親としてのあり方を反省されたり、子育ての方法を工夫されたりして前向きに取り組んでいる姿が見られた。

実施後の話し合いで、保護者 9 名中 7 名は、子どもが成長したと捉えていた。幼児の成長にプレイセラピーが多少なりとも一因となっていたという評価だった。

D 事例に関して、プレイセラピーと保護者や幼稚園との話し合いで見られたことを図式化すると、図 3 のよ

うになる。D と Th が信頼関係を築き、D のやりたいごっこ遊びを存分に演じ尽くすことで、D は自己への自信や自尊感情が育ち、クラスの友達とのかかわりを楽しむようになった。また、保育の中ではコミュニケーションの力や絵やお話での表現力や、人と関わる力が成長していた。家庭の中では、父親は憧れの対象でありモデルにしており、父親とは本気で遊んでいた。母親の語りからは、D の甘えを受容している様子であったが、D から母親をごっこ遊びへ誘いかけるなどその関係が多少変化しているようだった。また、幼稚園の担任や大学教員から、D の成長を聞いたり、見たりすることでも D との関係は変化したと考えられる。

その他の事例では、子どもの問題に不安の大きかった保護者が支えを得て動き始めたり、幼稚園と家庭との幼児の姿のちがいに戸惑った母親が、話し合い等を通して理解を深めて行ったりなど、プレイセラピーを一つのきっかけとして保護者が変化していった。このような親子の関係性の変化や親支援という意味で子育て支援となったのではないかと考える。

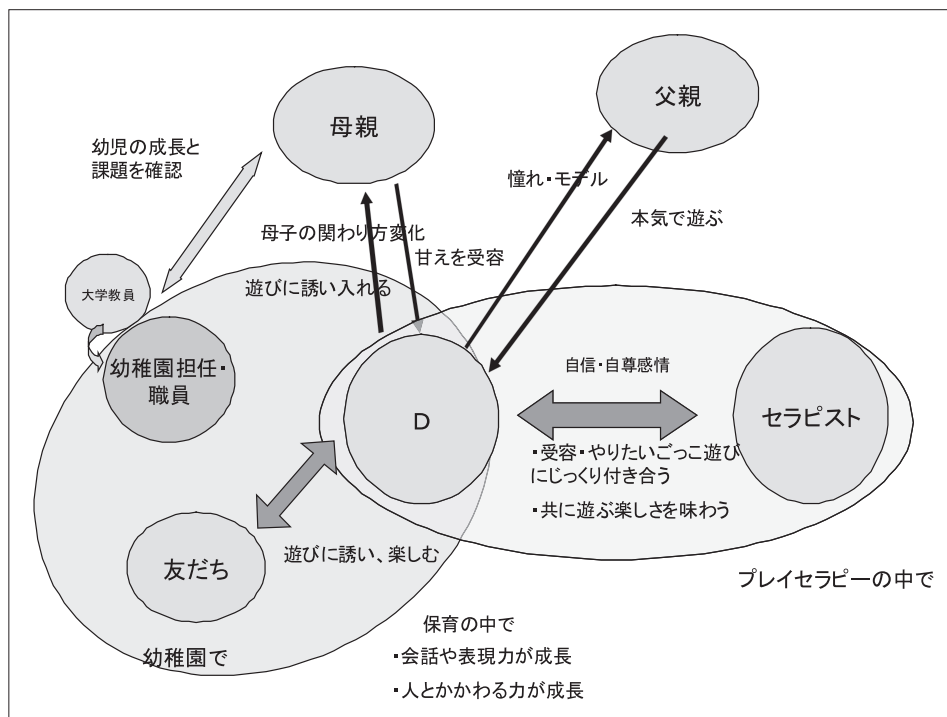


図 3. 事例 D

V. 今後の課題

保護者との連携に関して、幼児のプレイセラピーをすることに関しては了解を得られたが、それ以上の連携を取ることが難しく、幼児の生活や様子についてお聞きすることが出来なかった人がいた。家庭の協力を得られなかったことも影響し、プレイセラピーは途中で中断してしまった。保護者・幼稚園・Th（大学教員）の3者が協力し、機能しないと十分な子どもの成長や子育て支援につながらないことを改めて感じた。

質問紙調査に関しては、それぞれの担任や対象児を知っている保育者に評定していただいた。しかし、対象人数も少なく、クラスの中の状況や、評定者の捉え方など評定の基準が一致していないため、参考程度に留めた。引き続き検討の必要がある。プレイセラピーを行った臨床心理学を学ぶ大学院生にとっては、地域臨床を学ぶ良い機会ともなった。大学院生にとっても、この実践がどのような効果があったのかを、ここでは検討することが出来なかった。今後の課題としたい。

謝 辞

この研究は鳴門教育大学の平成22年度教育研究支援プロジェクト経費をいただいて研究したものである。この研究にご協力いただいた2つの幼稚園の園長先生や教員の皆様へお礼申し上げます。そして、9組の幼児とその

御家族にも感謝申し上げます。特に、本論文への事例の投稿を快諾していただいた幼児とそのご両親様に心より感謝申し上げます。また、プレイセラピーを担当し事例を提供してくださった、修了生の竹内智世様に感謝いたします。

引用・参考文献

- 安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ—子育て支援利用との関係— 保育学研究 第46巻第2号 2008 99—108
- 東山紘久 遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む— 創元社 2003
- 葛西真記子・中津郁子 他 乳幼児との情動調律による感受性訓練の効果—心理療法家を目指す大学院生を対象に— 鳴門教育大学研究紀要 第24巻 2009 130—141
- 国立教育政策研究所 http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk2.html
- Landreth, G. Play therapy : The art of the relationship second edition 2002 (山中康裕監訳 プレイセラピー関係性の営み 日本評論社 2007)
- 中津郁子・両木理恵 臨床心理を学ぶ大学院生における保育実習の意義について 鳴門教育大学研究紀要 第25巻 2010 73—87
- 西村智子・小泉令三 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の保育者評価 福岡教育大学紀要 第59号 第4分冊 2010 103—109
- Piaget, J.&Inhelder, B. The psychology of the child New York : Basic Books 1969
- 竹内通夫 ピアジェの発達理論と幼児教育 (株)あるむ 1999
- Winnicott, D. Playing and Reality Tavistock Publication Ltd London 1971 (ウイニコット／橋本雅雄訳 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社 1979)
- 幼稚園教育要領 1998年12月 文部省

A Practice-based Study of Play Therapy : The effectiveness of play therapy in Kindergarten as a support measure for young children's growth potential and child rearing

NAKATSU Ikuko*, KUME Teiko*, AIHARA Ryoza*,
INOUE Kazuomi*, KASAI Makiko*, YOSHII Kenzi*,
IMADA Yuzo*, SOGAWA Kyoko*, OGURA Masayoshi*
and SUEUCHI Kayo**

(Keywords : Kindergarten, Play therapy, Growth potential, Child rearing support)

Abstract

Collaboration was organized between A university and two kindergartens in A city and play therapy was performed with nine children using empty kindergarten classrooms. University teachers with a clinical psychology qualification held discussions with the parents of these children, and kindergarten teachers provided consultation to the parents and exchanged information with them. The effectiveness of play therapy was verified on the basis of a questionnaire conducted before and after play therapy implementation. The results showed that after play therapy, the children became emotionally stable, had fewer behavior problems, and showed an improvement in their social nature. Moreover, seven out of the nine parents perceived that their children had matured. The kindergarten teachers presented the same evaluation from their results. The practice records showed that the children gained confidence and pride by enjoying playing with therapists and being accepted by them, which led to them taking interest in their friends. Their growth potential was activated. In addition, changes in parent-child relationships were observed. Play therapy also supported the parents, and it was considered an effective child raising support measure.

*Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education

**Practice of School Clinical Psychology, Naruto University of Education